

NII News

No.10
June 2002

平成14年6月

国立情報学研究所ニュース 第10号



CONTENTS

- | | | |
|----------|----|---|
| 特集 | 1 | 大学院情報学専攻(博士後期課程)に入学者14名 |
| NII定例研究会 | 2 | 第16回<3月20日> 日常言語コンピューティングの発想(理化学研究所 菅野 道夫)
製造業リモートファクトリマネージメントに関する研究開発
(NTTサイバーソリューション研究所 武藤 伸洋) |
| | | 第17回<4月17日> DualNAVIによる連想的情報アクセス(国立情報学研究所 高野 明彦)
モバイルオブジェクト・システムPlanetの経験とセキュア・ソフトウェア・
サーキュレーションシステムSoftwarePotの設計(筑波大学 加藤 和彦) |
| トピックス | 4 | 特別講演「大学からの研究成果の技術移転 ウィスコンシン州立大学マディソン校と
ワシントン州立大学シアトル校を例として」(ワシントン州立大学名誉教授 Ray BOWEN)
軽井沢国際高等セミナーハウス五周年記念式典・記念講演会 / 平成13年度軽井沢公開講演会
(3月23日)ユネスコのInformation for Allプロジェクトをお手伝いして(国立情報学研究所 羽鳥 光俊)
名誉教授の称号授与 / 受賞
HOT NEWS 1 情報検索サービスの機関別定額制利用機関が250機関突破 |
| 事業活動 | 8 | ドイツの日本研究図書館でのNACSIS-CAT、NACSIS-ILL利用の近況 / 日米ドキュメント・デリバリー・サービスの運用開始 / 日中韓国語の名前典拠ワークショップの開催 / 「大学における情報セキュリティポリシーの考え方」の公開について
HOT NEWS 2 研究成果出版物「情報学シリーズ」を刊行 |
| NII掲示板 | 10 | 人事異動 |
| お知らせ | 11 | 今後の研究会・シンポジウム・行事等の予定 |

大学院情報学専攻(博士後期課程)に 入学者14名

平成14年度から、国立情報学研究所は、本研究所独自の大学院教育を行うことの重要性、また、高度IT専門家養成のための社会への要望に応えるために、大学共同利用機関を専攻の基盤組織とする大学院(博士後期課程)のみの大学である総合研究大学院大学に参加し、同大学数物科学研究科に情報学専攻を設置し、学生を受入れることとなりましたが、去る4月10日に、諸所の準備のもとに入学試験を実施し、情報学専攻委員会等での選考の結果、募集定員6名に対し、14名の入学者を迎えることとなりました。

4月18日には、神奈川県三浦郡葉山町にあります総合研究大学院大学において大学全体としての入学式が挙行され、また、4月22日には、本研究所において情報学専攻への入学生に対するガイダンスを開催するとともに、4月下旬より講義を開始したところです。

情報学専攻では、情報学の素養を身につけ、広い視野、柔軟な思考力と高度な専門的知識を持つ研究者や技術者を養成することを目的としており、その目的達成のために、本研究所施設設備、教官体制及び教育課程等も含め、今後、ますますの大学院教育の充実を行っていくこととしています。

学生の募集については、4月入学のみならず、10月入学も募

(詳細は、本研究所HP <http://www.nii.ac.jp/daigakuin/youkou.html> を参照願います。)



集することとしており、平成14年10月入学、平成15年4月入学に関する学生募集日程については、大凡以下のとおりです。

また、情報学専攻においては、アジアを中心とした外国からの優秀な留学生を募集し、国際的な雰囲気のもとで教育を行い、学術研究の新しい流れに対応できる幅広い視野を持った国際的で独創性豊かな研究者の養成を目的として、平成14年10月より、国際大学院コースを開設することとしています。

同コースにおいては、英語による講義を原則としており、将来、本コースを巣立った留学生たちが帰国後、あるいは新天地において、国際的リーダーとして活躍することが期待されています。

1.平成14年10月入学学生募集日程

出願期間:平成14年7月29日(月)~8月2日(金)
 選抜期日:平成14年8月19日(月)~9月6日(金)のうち1日
 合格発表:平成14年9月下旬
 入学手続:平成14年9月下旬



2.平成15年4月入学学生募集日程

《第1回目》
 出願期間:平成14年8月5日(月)~9日(金)
 選抜期日:平成14年8月26日(月)~9月6日(金)のうち1日
 合格発表:平成14年9月下旬
 入学手続:平成15年3月10日(月)~14日(金)

《第2回目》
 出願期間:平成14年12月9日(月)~13日(金)
 選抜期日:平成15年1月27日(月)~2月14日(金)のうち1日
 合格発表:平成15年2月下旬
 入学手続:平成15年3月10日(月)~14日(金)

7月25日(木)に、「平成14年度国立情報学研究所オープンハウス」開催!

本研究所では、平成14年7月25日(木)に「平成14年度国立情報学研究所オープンハウス」を予定しています。当日は、情報学専攻入学希望者等の方々に大学院紹介、パネル展示、進学相談などを行います。

どなたでも参加することが出来ますので、この機会をどうぞご利用下さい。

(研究協力課)

■ 日常言語コンピューティングの発想



理化学研究所 脳科学総合研究センター
言語知能システム研究チーム チームリーダー

東京工業大学名誉教授

菅野 道夫

(すげの みちお)

1962年東京大学理学部卒。工学博士(東京工業大学) 名誉博士(マドリード工科大学)。三菱原子力工業、東京工業大学制御工学科助手、同知能システム科学専攻教授などを経て、2000年4月より、理化学研究所脳科学総合研究センターチームリーダー。専門はファジイ理論、ファジイ制御、知的コンピューティングなど。

地域、性、年齢、職業などの違いにより使い分けられている日々の話し言葉を指している。

日常言語コンピューティングの発想を一言で言えば、「コンピュータの言語化」である。言語化のための要素技術として、セmiotick(記号)ベース、言語通信プロトコル、言語アプリケーション、日常言語インタフェース、言語OSなどがある。

ヒトの脳はハードウェアとしての神経システムとソフトウェアとしての言語システムから成っている。他の種と比べてヒトの種が知的であると言われるのは、脳のハードウェアの特殊性ではなく、他の種に見られない高度で複雑な言語システムを持つことによる。言語はコミュニケーションの道具として発達したと思われるが、ヒトは同時に言語により認識し、思考している。ヒトの脳そのものも「脳と言語との共進化」と言われるように、言語に合わせて進化して来た。

日常言語コンピューティングとは、ヒトの脳に倣って、コンピュータ上で言語により知的に情報統合、情報管理、そして一般に情報処理を行なおうとする発想である。ここで、日常言語とは、

中でも、セmiotickベースはコンピュータに言語知能を埋め込む巨大データベースで、意味を扱うヒトの言語システムをハリデーが創始した選択体系機能言語理論に基づいて記述したものである。これにより、コンピュータは言語理解と生成の能力を持ち、コンピュータ内通信を言語プロトコルに従い、あたかもヒトのコミュニケーションのように言語で行なえるようになる。言語アプリケーションとは、コンピュータネットワーク上のソフトウェア/ハードウェアアプリケーションを、その言語モデルを通じて言語によってアクセスし、利用できるようにしたものである。これらコンピューティング環境は、日常言語インタフェースを持つ言語OSにより管理される。

■ 製造業リモートファクトリマネージメントに関する研究開発



知能システム研究系 ロボティクス研究部門 客員助教授
NTTサイバーソリューション研究所主任研究員

武藤 伸洋

(むとう しんよう)

1990年早稲田大学大学院理工学部機械工学科修士課程修了。同年日本電信電話株式会社入社、ヒューマンインタフェース研究所勤務。1999年より日本電信電話株式会社サイバーソリューション研究所主任研究員。ロボットセンサシステム、ウェアラブルPCを用いた作業支援システム、ヒューマンインタフェースの研究に従事。2000年より国立情報学研究所知能システム系客員助教授。日本ロボット学会正会員、日本機械学会正会員。

情報の構造化、作業支援のためのコンピュータネットワーク環境に関する研究開発を進めた。

まず、製造機器情報の構造化としては、XMLをベースにFDML(Field Data Markup Language)を定義し、各種デジタル・アナログ情報をmsec単位のタイムスタンプを付与した形式により、マルチベンダ機器からの情報のデー

タセンタ統合管理を実現し、データ異常時の警報通知や関連データ自動収集、各種データ表示解析機能を提供可能とした。次に、作業支援環境としては、ウェアラブル/モバイルPCを利用した、マニュアル・設備DB等の情報参照機能、点検や修理作業における作業記録の作成・DB登録機能、遠隔サポートセンタからの作業支援を実現する多地点対応音声画像通信機能、ハンズフリー操作のための音声操作機能を構築するとともに、これら工場内の多数の機器情報と、作業情報を統合的かつセキュアに管理するゲートウェイ機器を開発した。

ファクトリデータセンタの役割としては、工場内の製造機器のデータや、作業者の作業データを統合的に活用し、点検保守の効率化、生産性の向上を目指すことがあげられる。このような構想の中で、多様な製造機器からの情報収集と管理、

現場作業者に対する情報支援、作業情報と機器情報との統合化、の3点を一段階の課題とし、XMLによる製造機器

現在、トライアル実験等による検証、各種委員会コンソーシアムでの提案活動進めており、今後は、実験結果をフィードバックし、実用導入に向けた商用化フェーズに移行する予定である。

DualNAVIによる連想的情報アクセス



ソフトウェア研究系プログラミング言語研究部門 教授

高野 明彦

(たかの あきひこ)

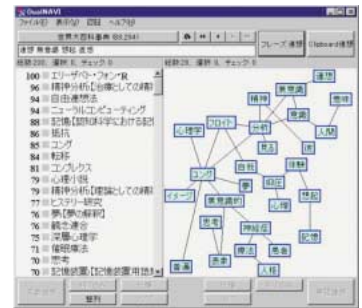
1980年東京大学理学部卒。同年(株)日立製作所入社。同社基礎研究所主任研究員、オランダ国立研CWI客員研究員、中央研究所主任研究員などを経て、2001年1月より現職。博士(理学)。2002年4月より東京大学大学院情報理工学系研究科教授(併任)。専門は、関数プログラミング、プログラム変換、連想の情報学。

れるならば、ある意味で「第二の脳」としての役割を果たせる。

この新しい創造的相互作用に理論的・技術的基礎づけを与える「連想の情報学」の確立を目指している。我々は主に情報科学の手法でアプローチして、膨大な情報に基づく連想過程を連想計算として実現し、それに基づく連想的文書検索システムDualNAVI(デュアル)

自分の脳に蓄えられた情報(知)に基づいて思考する人間を、外部の膨大な情報と創造的に相互作用(interact)させるためのカギは、人間の連想能力の活性化にあると考える。記憶検索やプライミングの研究が示すように、記憶内の連想的探索は関連知識の無意識的想起を引き起こし、それが人間の創造活動にとって重要な役割を果たしている。人間の創造性を高める新しい情報技術の基礎は、脳内の記憶の連想的探索・無意識的想起と、脳の外にある膨大な情報からの関連情報の探索・分析・提示との新しい結びつきに求められる。外部の情報が、ユーザの連想的探索を可能にする形で提供され、探索結果がユーザの無意識的想起を促す形でフィードバックさ

ル連想検索を開発している。その特徴は、検索時にキーワードではなく文書(群)を入力して類似の文書を検索する文書連想検索と、検索結果として得られる文書群の内容的把握を助ける特徴語グラフ(自動要約機能)の有機的連携である。新聞、百科事典などの実用規模DBへの適用を通じて、原始的な形とはいえ、DualNAVIは創造的相互作用の場を提供することに成功し、「連想の情報学」の有効性を示した。



モバイルオブジェクト・システムPlanetの経験とセキュア・ソフトウェア・サーキュレーションシステムSoftwarePotの設計



ソフトウェア研究系
高信頼ソフトウェア研究部門 客員助教授
筑波大学 電子・情報工学系 助教授

加藤 和彦

(かとう かずひこ)

1989年東京大学大学院理学系研究科情報科学専攻中退。1989年東京大学理学部情報科学科助手、1993年筑波大学電子・情報工学系講師、1996年同助教授、現在に至る。2000年より科学技術振興事業団さきがけ研究21「協調と制御」領域研究者、2002年より国立情報学研究所客員助教授を兼任。オペレーティングシステム、プログラミングシステム、分散システム、モバイルコンピューティング、セキュアコンピューティングに興味を持つ。情報処理学会、電子情報通信学会、日本ソフトウェア科学会、ACM、IEEE各会員。

イラ言語およびインタープリタ言語)モバイルJITコンパイラによる異機種間オブジェクト移動、モバイルWeb検索ロボット等について述べた。

現在、Planet研究での経験をもとに、より一般的に、ソフトウェアの安全な流通と実行を支援する基盤ソフトウェアシステムSoftwarePotの研究開発を進めている。現状では、ソフトウェアの配布はCD-ROM等の記録媒体やインターネットを用いた配信によって行われているが、

広域ネットワーク環境上の基盤システムソフトウェアに関する研究開発を行っている。講演前半では、これまでに研究開発を行ってきたPlanetシステムの概要と経験を述べ、後半では、その経験をもとに新たな研究プロジェクトとして遂行しているSoftwarePotシステムの概要を述べた。

Planetは、オペレーティングシステム・レベルおよびソフトウェア・レベルの技術を駆使することにより、プログラミング言語設計も仮想機械設計も固定することなしに、広域ネットワーク環境上でのモバイルオブジェクト・コンピューティングを実現する基盤ソフトウェアである。講演では、Planetシステムの概要と、Planetを用いて実現したモバイルプログラミング言語システム(コンパ

配布されたソフトウェアを受け取ったユーザは、そのソフトウェアが悪意ある動作や誤動作を行わないことを信じてインストール作業および実行を行っている。SoftwarePotシステムでは、ソフトウェアの配布・実行に相当する操作を、ソフトウェアポットと呼ばれる、移動可能で密閉されたファイルスペースを用いて行う。ユーザが所有するファイルスペースへの直接的なインストール作業は必要とせず、隔離した空間で実行を行うことにより安全性を確保する。必要に応じて、ソフトウェアポット内の資源とユーザが所有する資源とのマッピングを行うことにより、それらの間の影響の授受を制御する。講演では、同システムの基本モデル、設計、実現技術、実験結果について述べた。

特別
講演

「大学からの研究成果の技術移転 ウィスコンシン州立大学マディソン校と ワシントン州立大学シアトル校を例として」



ワシントン州立大学シアトル校名誉教授
京都大学国際融合創造センター客員教授

Ray BOWEN

(レイ・ボーエン)

1957年マサチューセッツ工科大学工学修士課程修了、1963年カリフォルニア大学バークレー校博士課程修了後、ウィスコンシン州立大学マディソン校化学工学部長、同校副学長補、ワシントン州立大学シアトル校工学部長、全米工学教育学会会長などを歴任。

4月23日、ボーエン教授を迎え、国立情報学研究所において、ウィスコンシン州立大学とワシントン州立大学を例に、アメリカにおける産学連携による技術移転の状況について、講演が行われました。講演の概要は、以下のとおりです。

1980年に成立したバイ・ドール法は、政府の出資による研究で得られた研究成果の商業化を促すもので、その結果、多くの大学において技術移転を支援する組織が作られた。

技術移転が成功するためには、(1)大学が、知的財産マネージャーを雇用し、技術移転支援のための基盤整備を行うこと、(2)ベンチャーキャピタルへのアクセスが容易であること、(3)企業を起すための支援環境が整っていること、の3点が必要不可欠である。

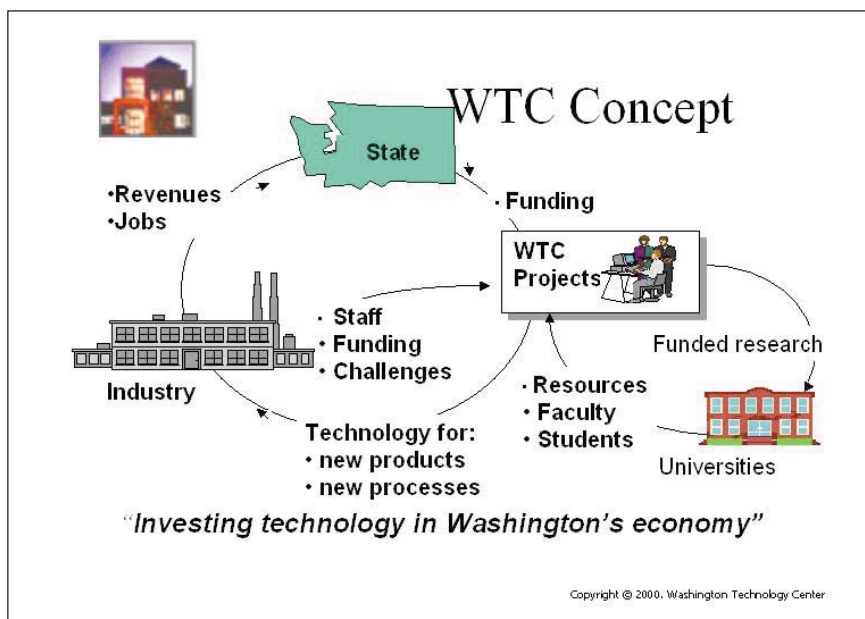
ウィスコンシン州立大学マディソン校では1925年に、技術移転機関であるウィスコンシン州立大学卒業生研究財団(WARF)を設立。現在までの間に、取得した特許の1%が特許出願に係る費用を取り戻し、特許使用料を生み出しているのは0.1%である。大学にもたらされ

た利益は、総額で6億2,000万ドル、最近の年間利益は3,500万ドルである。1960年には産学連携機関が、また1984年には別の非営利機関である大学研究パーク(URP)が創設されている。

ワシントン州立大学シアトル校は、WARFを参考に1981年にワシントン研究財団(WRF)を創設。現在は、大学のみならず、州の研究所の技術移転も取り扱っている。WRFは、一定の条件の下、プロジェクトに対し200万ドルまで投資できる。1983年にはワシントン州議会が産学連携を強化するためにワシントン技術センター(WTC)を設置した。その後、WTCがWTC出資のプロジェクトから得た知的所有権を管理することとなったが、大学はこれを不服とし、1986年、新たに「技術移転室(現、知的所有権及び技術移転室)」を創設した。WTCは年平均25のプロジェクトに計200万ドル以上を出資しており、1件当たり5,000ドルから10万ドル。特に、小規模な企業や新規企業を対象としている。

バイ・ドール法はアメリカの大学の特許の取得に大きな影響を与えた。1985年には589件だったものが、1998年には3,151件と、5.4倍以上となっている(同時期のアメリカ全体の特許取得は約2倍の増)。特許取得数は、ウィスコンシン州立大学マディソン校では17件から83件に、ワシントン州立大学シアトル校では1件から47件に増えている。大学研究に対する産業界の支援は1985年の6億3,000万ドル(6.1%)から、1998年には18億9,600万ドル(7.2%)となっている。すべての新規企業が成功したわけではなく、その多くが失敗している事は事実である。

(原文英語)



国立情報学研究所 軽井沢国際高等セミナーハウス五周年記念式典・記念講演会を挙



記念講演会で御講演される森亘先生

国立情報学研究所では、5月11日(土)、軽井沢国際高等セミナーハウスの五周年記念式典・記念講演会を当セミナーハウスで行いました。当セミナーハウスは、故猪瀬博前所長から寄贈された土地に建設されたもので、平成9年の創設以来、国内外の方々を招いての様々なセミナーや研究会等が行われているほか、軽井沢土曜懇話会等を開催し地元軽井沢の方々の参加もいただくなど好評を得ています。今回の式典には文部科学省より、遠藤昭雄研究振興局長、明野吉成情報課長また地元からは佐藤雅義軽井沢町長、依田龍治軽井沢教育長等多くの方の御出席を賜りました。

続いて森 亘日本医学会会長(東京大学名誉教授、国立情報学研究所評議員)による記念講演『望ましい医療』を軽井沢土曜懇話会平成14年度第1回として開催しました。日本学術会議会員、医道審議会会長、臨時脳死及び臓器移植調査会会長代理等の要職を歴任された森先生の御講演は次のよ

うなものでした。

「医療にとって一番必要なものは、医師と患者との間の信頼関係であると考えます。そのためには先ず、信頼に足る医師を作り、良好な場を整えることが大切です。では、どのような人たちが「望ましい医師」か。また、どのような環境が「望ましい病院」か。これらはいへん難しく、旧くて新しい医学・医療上の大問題です。それらに纏わる話題をいくつか提供したいと思います。」(当日配布資料より)

その後、開所当時の学術国際局長であった林田英樹東宮太夫そして、猪瀬博先生夫人の猪瀬満利子様をまじえて記念植樹を行いました。

当日は心配された雨も降らず、あたり一面の芽吹き of 柔らかかな緑を参加者一同堪能しました。

(成果普及課)



記念植樹(コメツガ)を終えて

平成13年度軽井沢公開講演会(3月23日)



自動車ジャーナリスト
自動車史研究者
日本クラシックカー・クラブ会長

小林 彰太郎
(こばやし しょうたろう)

軽井沢の国際高等セミナーハウスにおいて3月23日(土)に公開講演会が開催されました。今回は自動車ジャーナリストで、自動車史研究者、日本クラシックカー・クラブ会長の小林彰太郎氏に『文化財としてのクラシックカー』というテーマで次のようなお話をいただきました。

「自動車は20世紀最大の発明です。自動車を途方もない大量生産・大量販売によってその価格を引き下げ、庶民の実用的な足にしたのは、ヘンリー・フォード一世の功績です。一方その対極には、「クラシックカー」と呼ばれて珍重される、非常にクオリティの高いクルマの一群が存在します。そのなかには「文化財」の名にも値するような車さえあり、それらを数々のスライドを交えてご

紹介します。」(当日配布資料より)

なお、今回の軽井沢公開講演会より軽井沢の公開講演会(軽井沢土曜懇話会)はエルネットと国立情報学研究所のホームページでこの秋から公開する予定です。

(成果普及課)

ユネスコのInformation for All プロジェクトをお手伝いして



情報メディア研究系 教授

羽鳥 光俊

(はとり みつとし)

日本ユネスコ国内委員会のお手伝いをさせていただきこととなり、4月にパリで開催された第1回ユネスコIFA(Information for All)政府間理事会に出席した。

最近の情報技術(IT、ICT)分野におけるユネスコの活動の中でも、多言語主義の利用促進とサイバースペースへの普遍的アクセス、ユネスコと国際的ICTイニシアティブに関心が持たれる。我が国としては、IFA信託基金(1億7000万円/年)を拠出しており、事業の精選・重点化を支持し、「情報政策開発」を中心とすべきとしている。

多言語主義の促進は古くて新しい、面白いが難しい問題である。例えば、人名の読み方、キーインの仕方が、日本語と中国語、韓国語、英語で異なるという、内藤先生、宮澤先生の研究があるが、多言語の面白いが難しい典型例であろう。普遍的アクセスは、端的に言えば、著作権に対する例外的配慮を求

める途上国の希望と、受入れることの難しさを主張する米国等先進諸国の主張の調整である。ユネスコと国際的ICTイニシアティブについては、2003年の世界情報社会サミットに、ITUは発展途上国のICTインフラ作りへの協力を推進しており、ユネスコとしては、コンテンツ、サービス等のソフト作り、なかんずく、発展途上国の学校教育を重点的に推進すべきである。

IFA政府間理事会は、国連の公用語である6ヶ国語(仏語、英語、露語、中国語、スペイン語、アラビア語)の同時通訳の下に行われた。あらかじめ原稿を提出することを求められない同時通訳であり、その見事さと、同時通訳をコンピュータにより行うことは未だに難しいことを改めて認識するとともに、いまさら言うまでもなく非常に難しいが重要な研究・開発テーマであると思った。

IFA政府間理事会へのITバーチャル技術の採用についても議論された。有用であるが大きな欠点もある。それは、発言のタイミングの選択であり、タイミングを外さないように即刻発言するためには、PCの前に長時間拘束されることになるという点であった。これも研究・開発に値する難しいが面白いテーマである。ちなみに小生の発言のタイミングは高橋ユネスコ大使におまかせし、教えていただいた。

東洋大に移られた内藤先生と情報メディア研究系研究主幹の山本先生も御一緒にユネスコのお手伝いをされており、両先生のお力を借り、そのための研究・開発を行うことができらうれしく思う。

HOT NEWS

情報検索サービスの機関別定額制利用機関が250機関突破

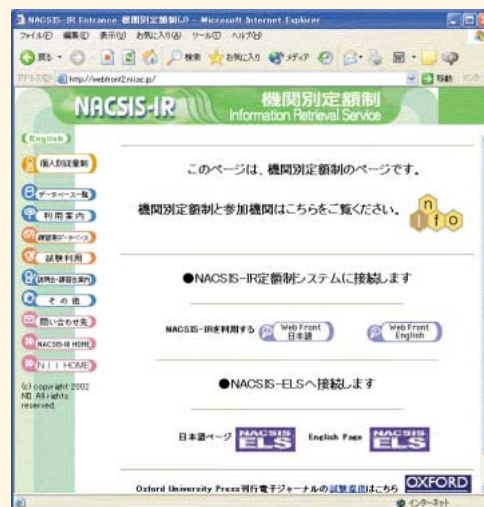
平成14年4月より開始した、情報検索サービスの機関別定額制の利用機関がこのたび250機関を突破しました。

機関別定額制は、大学等から導入の要望が多かった制度であり、利用者ごとに必要であった利用申請が不要になるほか、利用料金支払事務を簡素化できるメリットがあります。また、電子図書館サービスのうち、学会から許諾の得られた論文誌についても併せてご利用いただけます。

4月1日開始当初の利用機関は179機関でしたが、その後参加機関が増加し、5月16日現在で251機関となっています。

(企画調整課)

URL <http://webfront2.nii.ac.jp>



■ 名誉教授の称号授与



佐和隆光先生(現京都大学経済研究所長)に当研究所名誉教授の称号が授与されました。佐和先生は平成12年4月1日から2年間にわたり当研究所の企画調整官(副所長)に併任され、京都大学教授の傍ら、当研究所長の補佐、所長事務取扱として当研究所の管理運営に御尽力いただきました。

(総務課)

名誉教授称号授与式にて
(左から3人目が佐和先生)

■ 受賞

小野欽司教授が情報処理学会フェロー称号を授与

平成14年3月12日に、東京電機大学で開催された情報処理学会全国大会において、小野欽司研究総主幹/教授に対して、同学会からフェロー称号が授与されました。情報処理学会フェローは、情報処理および情報通信の分野で貢献した会員に

授与されるもので、小野教授は「マルチメディア情報通信における先駆的研究開発への貢献」の功績に対して授与されたものです。

羽鳥光俊教授が電子情報通信学会平成13年度功績賞を受賞

羽鳥光俊開発・事業部長/教授が、電子情報通信学会平成13年度功績賞を受賞しました。伝送路符号に関する研究、テレビジョン信号の帯域圧縮に関する研究、適応デジタルフィルタとその応用に関する研究など、通信及び信号処理の分野

での貢献、総務省情報通信審議会委員としての活躍等に対して授与されたものです。

また、平成14年5月に電子情報通信学会会長に就任しました。

山田誠二知能システム研究系教授が人工知能学会研究奨励賞を受賞

山田誠二知能システム研究系計算知能研究部門教授が、5月30日の第16回人工知能学会全国大会において研究奨励

賞を受賞しました。受賞対象研究は「Webページにおける部分情報の更新モニタリング」です。

村田剛志情報学基礎研究系助教授が人工知能学会全国大会優秀論文賞を受賞

村田剛志情報学基礎研究系認知科学研究部門助教授が、5月30日の第16回人工知能学会全国大会において大会優秀論文賞を受賞しました。受賞対象論文は2001年度人工知能

学会全国大会(第15回)論文集(2001年5月)に掲載された「Webコミュニティにおけるコアメンバーの発見」です。

武田英明知能システム研究系助教授が2001年度人工知能学会全国大会ベストプレゼンテーション賞を受賞

武田英明知能システム研究系知識処理研究部門助教授が、5月30日の第16回人工知能学会全国大会において2001年度人工知能学会全国大会ベストプレゼンテーション賞を受賞しま

した。受賞対象論文は「Ubiquitous memories:実世界の物理的オブジェクトを用いた記憶外在化システム」です。

相澤彰子情報基盤研究系助教授が情報処理学会平成13年度論文賞を受賞

相澤彰子情報基盤研究系情報流通基盤研究部門助教授が、5月20日の第44回情報処理学会通常総会において論文賞を受賞しました。受賞対象論文は情報処理学会論文誌

(Vol.41, No.12(2000))に掲載された「語と文書の共起に基づく特徴度の数量的表現について」です。

ドイツの日本研究図書館での NACSIS-CAT、NACSIS-ILL利用の近況

平成12年11月のベルリン日独センターでの「21世紀における日本情報」ワークショップ開催での紹介と直後のハイデルベルク大学でのデモンストレーション^{注1}をきっかけに、平成13年11月にケルン日本文化会館を会場に海外では初めての目録システム講習会^{注2}を開催しました。この実務研修に参加して、ドイツ語圏関係機関のNACSIS-CAT参加^{注3}への気運が高まっていることが判りました。新たな参加希望館への講習

やブラッシュアップのために、この7月末にミュンヘン大学で2回目となる目録システム講習会を開催する準備が現在進んでいます。この他、各図書館のOPAC(オンライン蔵書目録)として利用できるNIIの個別サービスSPCAT^{注4}の利用マニュアルのドイツ語訳が完成間近でした。

さらに、一部の図書館室では、NACSIS-ILLへの参加希望の表明があり、日本の大学図書館にドイツから複写や現物借用の依頼が寄せられるのもそう遠くないことが判りましたので、今後日本の特に大学図書館ではドイツからのILL受付の準備が必要かと思えます。

この他、フランクフルト・アン・マインにあるドイツ国立図書館においてNIIとの今後の協力について協議してきました。

注1：NII News No.2 p.13(2000.12)

注2：NII News No.8 p.14(2002.01)

注3：既に、ドイツ語圏からは9機関が参加しています。

注4：NII News No.9 p.10(2002.03)

(コンテンツ課)



ドイツ国立図書館でのミーティング

日米ドキュメント・デリバリー・サービスの運用開始

平成14年4月15日から、日米間のドキュメント・デリバリー・サービスの運用が始まりました。これは、国立情報学研究所の提供するNACSIS-ILL(図書館間相互貸借)システムとOCLC(Online Computer Library Center:米国の書誌ユーティリティ、ILLサービス機関)のILLシステムとの連携(ILLシステム間リンク)を使うことで実現したものです。参加図書館は、米国の図書館に対しても国内と同様に文献複写の依頼・受付業務を行うことができるようになりました。また、この運用は、日米の大学図書館の協議と併行して行われていた国立情報学研究所とOCLCとの協議結果を踏まえたものでもあります。なお、このILLシステム間リンクは、ISO(国際標準化機構)の国際規格となっているILLプロトコルを使用しているもので、このプロトコルを用いた業務レベルでの書誌ユーティリティ間の接続は、世界で初めてです。

平成14年1月に日米それぞれ3大学で試行運用を開始し、その後、国立大学図書館の代表4機関(東京大学、東京工業大学、千葉大学、北海道大学)と共に米国側の機関(ARL: Association of Research Libraries, University of Massachusetts, University of Washington)を訪問して



ARLにおける協議

直接協議を行い、最終的な調整を行った結果、今回の本格的な運用が実現しました。

平成14年5月現在で、日本国内から54館、米国側から16館が参加しています。今後、米国の参加館も随時増加する予定です。この運用が活用されることで、学術情報の流通がより円滑となり、研究活動への貢献が期待されます。

(コンテンツ課)

■ 日中韓国語の名前典拠ワークショップの開催

国立情報学研究所では、平成14年3月14日から3月18日にかけて、軽井沢、東京及び京都で「第3回 日中韓国語の名前典拠ワークショップ (CJK Authority 3)」を開催しました。

平成12年度に引き続き、NACSIS-CAT(国立情報学研究所)、JAPAN/MARC(国立国会図書館)、China MARC(中国国家図書館)、KORMARC(韓国国立中央図書館)及びKERIS-Union Catalog(韓国教育学术情報院)の専門家から各機関での著者名の標準的な取扱いとその進展について報告を受けました。

また、国際図書館連盟(IFLA)のコンサルタントとして書誌レコードの機能性に関するモデル開発に携わった米国議会図書館のBarbara Tillett目録政策・支援局長から、書誌及び典拠情報の円滑な共有を指向する「FRBR(Functional Requirements for Bibliographic Records: 書誌レコードの機能要件)モデル」と「VIAF(A Virtual International Authority File: パーチャル国際典拠ファイル)」についての講演が行われました。

各会場において、参加した大学等図書館の実務担当者と講師の間で活発な議論が交わされました。



Barbara Tillett氏による講演



(コンテンツ課)



研究成果出版物「情報学シリーズ」を刊行

国立情報学研究所では、研究所の研究成果を広く社会全般に普及することを目的に、研究所の教官・研究者の研究内容や研究所が開催する講演会等の発表内容について、一般の方にも理解しやすい形でまとめた図書を「情報学シリーズ」として監修し、刊行しています。今回、情報学シリーズ4、5として、次の2冊を新たに刊行いたしましたので、その概要をご紹介します。

情報学シリーズ4 「サイバー社会の商取引 コマース&マネーの法と経済」



国立情報学研究所監修
岡田 仁志
人間・社会情報研究系助教授 著

【主な内容】
「サイバー社会の光と影」
「アメリカのサイバー社会」
「ヨーロッパのサイバー社会」
「アジアのサイバー社会」
「日本のサイバー社会」
「サイバー社会の未来を考察する」

バーチャル空間における電子マネー、地域通貨、デビットカード等々について、その法的・経済的側面を、やさしく解説する、電子商取引入門書。著者が実際に調査・体験した豊富な事例をもとにeコマースの華やかな世界を紹介し、様々な国の様々な形態の電子マネー、地域マネー、ICカード、等々を実例と写真で示す。隠れた情報大国韓国の先進的取組みや、ヨーロッパ諸国での試行錯誤的な実験等、類書に見られない新発見が随所に見られる。

情報学シリーズ5 「図書館ネットワーク 書誌ユーティリティの世界」



国立情報学研究所監修
宮澤 彰
実証研究センター教授 著

【主な内容】
「書誌ユーティリティの誕生」
「書誌ユーティリティのサービス」
「日本における書誌ユーティリティの展開」
「世界の書誌ユーティリティ」
「最近の技術動向から」

書誌ユーティリティとはいったい何を指すのだろうか。本書では、日本における書誌ユーティリティの創設及び運用に深くかかわってきた著者がその豊富な知識と経験をもとに、オンライン共同目録、ILLメッセージ交換、総目録の公開といった機能を持ち先進国の図書館界における基本的インフラストラクチャである書誌ユーティリティについて、提供者側の視点からその歴史的経緯、役割、各国の事例等を紹介する。

【発行・販売】丸善株式会社 出版事業部 TEL:03-3272-0521
【問い合わせ】国際・研究協力部成果普及課 TEL:03-4212-2165 / E-mail:edu@nii.ac.jp

(成果普及課)

「大学における情報セキュリティポリシーの考え方」の公開について

情報セキュリティ対策について、内閣の情報セキュリティ対策推進会議により、平成12年7月18日に「情報セキュリティポリシーに関するガイドライン」が決定され、政府全体でセキュリティ対策の強化取り組みが行われており、大学においても、大学の情報セキュリティ対策の強化が課題となっております。

一方、大学のネットワークには、研究、教育、事務活動などのために多数かつ多様な情報を扱うコンピュータが接続されている複雑なネットワークであり、これまで情報資産のセキュリティ確保をするためのポリシー策定の参考となる一例がありませんでした。

このため、平成13年度に全国共同利用大型計算機センター長会議の下のコンピュータ・ネットワーク研究会を中心に、「大学の情報セキュリティポリシーに関する研究会」(事務局:国立情報学研究所)を発足し、大学の情報セキュリティポリシーの在り方について実践的な研究を行ってきました。平成14年3月末に、「大学における情報セキュリティポリシーの考え方」を

まとめることができ、全国7国立大学、国立情報学研究所のトップページ及びSINETのホームページ(URL <http://www.sinet.ad.jp/info/policy/index.html>)で公開しております。

また、国立情報学研究所では、平成14年度から新たに情報セキュリティに関する最新の動向やセキュリティ対策に関わる実習等を盛り込んだ実務担当者向けの研修コース「情報セキュリティ担当職員研修」を年6回開催するほか、大学等のネットワーク管理者向けに情報セキュリティポリシーに関する入門講座を全国6ヶ所の会場で開催する予定です。

「情報セキュリティ担当職員研修」の詳細については、「国立情報学研究所 平成14年度教育研修事業要綱」(URL <http://www.nii.ac.jp/hrd/>)をご参照ください。

情報セキュリティポリシーに関する入門講座の開催については、詳細が決まり次第、国立情報学研究所のホームページ等でご案内いたします。

(ネットワークシステム課 / 成果普及課)

NII 掲示板

人事異動(平成14年4月)

採用・転入(平成14年4月1日付)

日比野 靖	情報学基礎研究系計算理論研究部門教授 前職:北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科教授
米田 友洋	情報基盤研究系計算機アーキテクチャ研究部門教授 前職:東京工業大学大学院情報理工学研究科助教授
井宮 淳	ソフトウェア研究系システムソフトウェア研究部門教授 前職:千葉大学総合メディア基盤センター教授
山田 誠二	知能システム研究系計算知能研究部門教授 前職:東京工業大学大学院総合理工学研究科助教授
鈴木 正人	情報学基礎研究系計算理論研究部門助教授 前職:北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科助教授
松本 尚	情報基盤研究系計算機アーキテクチャ研究部門助教授 前職:東京大学大学院情報理工学系研究科助手
渡部 卓雄	ソフトウェア研究系 システムソフトウェア研究部門助教授 前職:東京工業大学大学院情報理工学研究科助教授
杉本 晃宏	知能システム研究系人間機械協調研究部門助教授 前職:京都大学大学院情報学研究科講師
奈良 高明	情報学基礎研究系情報数理研究部門助手 新規採用
青木 雄二	国際・研究協力部研究協力課長 前職:山形大学医学部医事課長
倉西 美由紀	国際・研究協力部広報調査課長 前職:文部科学省大臣官房国際課国際機関第一係長
大場 高志	開発・事業部コンテンツ課長 前職:千葉大学附属図書館情報サービス課長

転出(平成14年4月1日付)

内藤 衛亮	東洋大学社会学部教授 前職:人間・社会情報研究系情報管理学研究部門教授
福田 光宏	信州大学経済学部教授 前職:学術研究情報研究系理工系研究情報研究部門助教授
松井 一澄	東北大学研究協力部研究協力課長 前職:国際・研究協力部研究協力課長
秋山 和男	文部科学省研究開発局海洋地球課 地球・環境科学技術推進室室長補佐 前職:国際・研究協力部広報調査課長
京藤 貫	千葉大学附属図書館情報管理課長 前職:開発・事業部コンテンツ課長

所内異動(平成14年4月1日付)

根岸 正光	国際・研究協力部長(併任)
藤山 秋佐夫	情報学基礎研究系研究主幹(併任)
小山 照夫	人間・社会情報研究系研究主幹(併任)
宮澤 彰	学術研究情報研究系研究主幹(併任)
山田 茂樹	実証研究センター長(併任) 研究成果普及推進室長(併任)

併任解除(平成14年4月1日付)

佐和 隆光	京都大学経済研究所長 前職:教授・企画調整官
-------	---------------------------

お知らせ

平成14年度軽井沢土曜懇話会

国際高等セミナーハウス(長野県軽井沢町)を会場に開催します。

- 6月29日(土) 高階 秀爾 氏(元国立西洋美術館長)
- 7月13日(土) 上田 誠也 氏(東海大学海洋研究所地震予知研究センター長・東京大学名誉教授)
- 7月27日(土) 坂内 正夫 氏(東京大学生産技術研究所教授)
- 9月 7日(土) 小林 陽太郎 氏(富士ゼロックス(株)代表取締役会長)
- 9月28日(土) 大津 純子 氏(ヴァイオリニスト)

参加申込など詳細は成果普及課ホームページ URL <http://www.nii.ac.jp/hrd/>でご案内しています。

Seventh Pacific Rim International Conference on Artificial Intelligence (PRICAI-02) 第7回環太平洋人工知能国際会議

平成14年8月18日(日)~22日(木) 学術総合センター 一橋記念講堂(東京都千代田区一ツ橋)

主催:(社)人工知能学会、後援:国立情報学研究所

詳細についてはURL <http://pricai-02.nii.ac.jp/>でお知らせしています。

【問い合わせ】武田英明 知能システム研究系助教授 E-mail:takeda@nii.ac.jp

COMPUTERM 02: Second Workshop on Computational Terminology

隔年で開催される計算言語学分野の最大会議COLINGの併設ワークショップとして開催される第2回計算機専門用語学の国際ワークショップです。

平成14年8月31日(土) Academia Sinica, Taipei, Taiwan(台湾台北市)

詳細についてはURL

http://www.sciences.univ-nantes.fr/info/recherche/Theme_TALN/cfpComputerm02.html をご覧ください。

【問い合わせ】影浦峯 人間・社会情報研究系助教授 E-mail:kyo@nii.ac.jp

第3回NTCIRワークショップ成果報告会

日本語・中国語・韓国語・英語を対象とした言語横断検索、特許検索、質問応答、テキスト自動要約、Web検索など情報アクセスに関するテキスト処理技術の評価ワークショップを開催します。10カ国から約60研究グループの研究成果の報告を予定しています。使用言語は英語です。

平成14年10月8日(火)~10日(木) 学術総合センター 一橋記念講堂ほか(東京都千代田区一ツ橋)

詳細についてはURL <http://research.nii.ac.jp/ntcir/workshop/work-ja.html>でお知らせします。

【問い合わせ】NTCIRプログラム委員会 E-mail:ntcadm@nii.ac.jp

神門典子 人間・社会情報研究系助教授 E-mail:kando@nii.ac.jp

日本バーチャルリアリティ学会サイバースペースと仮想都市シンポジウム

平成14年12月2日(月) 学術総合センター 中会議場(東京都千代田区一ツ橋)

【問い合わせ】井上智雄 知能システム研究系助手 E-mail:inoue@nii.ac.jp

NII定例研究会

国立情報学研究所では、情報学研究に関心のある研究者・技術者の交流の場として、「NII定例研究会」を企画・運営しています。「NII定例研究会」は、月に1回定期的に開催しており、研究所内外の研究者による研究発表等を行っています。開かれた研究機関として外部にも公開しており、幅広い方々の参加を歓迎しています。

今後の開催予定は次のとおりです。

第20回:平成14年7月17日(水) 15:00~17:00 学術総合センター12階 会議室

プログラムの詳細はURL <http://research.nii.ac.jp/teirei/>でお知らせします。

参加は無料です。

【問い合わせ】NII定例研究会 企画グループ

情報学研究に関心をお持ちの皆様のご参加をお待ちしています。

国立情報学研究所の研究・事業活動について詳しくはホームページもご覧ください。
<http://www.nii.ac.jp/index-j.html>

